



ことば，コミュニケーション，異文化体験

遠山 顕 Toyama Ken

最初に訪れた外国はアメリカだった。1980年代初期のことで、それまでの僕といえば、職場で英語を使っていたこともあり、コミュニケーションについて、すこしは working knowledge というか、使える知識を持ち合わせていた。ただ、アメリカ人が多く乗った飛行機が、サンフランシスコ空港に着陸したとたんに機内で拍手が起こったあたりから、何かとても“異なるもの”を感じ始めていた。機の出口では、パイロットが、Good landing! と言ったりして降りていく乗客たちと挨拶や短い立ち話をしている。先程の拍手は彼のためのもので、彼は“高評”に応えるべく、そこに立っていたのだ！そこには日本的な操縦士と乗客の関係、あるいは関係のなさは存在せず、それが異文化の入口にいる僕に強い印象を与えた。この水平な感覚を、僕はすぐそのあとの通関時にも感じるようになった。

僕の前のビジネスマンがアタッシュケースの中の商品サンプルについて、係官から大声で執拗な質問を受けている。と、別の列が空き、係官がこちらへというジェスチャー。で、そこへ行き、パスポートを見せる。You're a Leo, huh? (獅子座なのかな?) と係官。Yes, I am. (そうですか) と僕。Me, too. (私も) と係官。You are? (そうですか) と僕。パスポートを返し Enjoy San Francisco. と係官。Thanks. と僕。通関は終わり、何とも明るい気分で出口へ向かった。本国人用の通関を先に済ませた友人たちに話すと、ヒッピーのメッカらしいことだ、他の空港ではそうは行かない、とのコメントが出た。

そのあと僕が体験したことも、目新しいことが多かった。他人同士で目が会ってチラと浮かべるスマイルや Hi. の挨拶。買い物客とレジ係が交わす

Hello. や、赤の他人に接触するのを避けるために使う Excuse me. など。そしてレストランでの、水が欲しいですか？メニューが見たいですか？挽きたての胡椒が欲しいですか？友人たちからの、町を見たいか？もっとここにいたいか？休みたいか？云々の Do you want (to) / Would you like (to) ナニナニ？の嵐が続く！黙って水を注ぎメニューを出せ、案内は任せるからいちいち訊くな、と心の中で思ったものだ。あとでそれらの質問が、相手の自由意志を尊重する気持ちの表れであり、相手の気持ちを察するのでなく、相手の意志を尋ねることが礼儀なのだ、と気付いたのは、やはりこの時のインパクトのおかげだったと思う。「以心伝心」という僕の文化背景に、「以言伝心」とでもいうべきものが加わった。後に米国人と結婚した僕に、「以言伝心」の嵐は強まるのだが、それはまた別の機会に思う。

上下の意識は、縦社会といわれる日本のみでなく、どの国にも存在するものだけれど、この初の異文化の旅で、横への意識、水平に並ぼうとする意志や建前も存在する社会に、目をすこし開くことができた。

あれから 30 年近くになるが、異文化接触の際に、無闇に衝撃や嫌悪を覚えないための「言葉構え」、といったものも携えて旅立ってもらえるよう、今年も英語を教えていければと思っている。

遠山 顕

東京外国語大学英米語科卒、テンプル大学大学院修了。コミュニケーションを中心に据えた「話学」を教える。NHK「ラジオ英会話」講師、コミュニケーション代表。近刊「Hi! 英語井」(朝日新聞出版)。和英琵琶一人芝居、日米映画「The Ramen Girl」など、俳優としても活動している。